国語と各教科の役割を意識し考えを深める手立てを充実

埼玉県 越谷市立蒲生（がもう）小学校

越谷市立蒲生小学校では、子どもが意見を出し合いながら、自分の考えを深めていくために各教科・領域で言語活動の取り組みを一覧にした。国語を中心に教師の手立てを大切にしながら研究を進めている。

課　題

- 他者と意見を交わし、自分の考えを深めていくのが苦手な子どもが多い
- 校内研究では書くことに力を入れてきたが、表現力や語彙力はなかなか高まらなかった

研究のねらい

- 国語を中心として、各教科・領域で言語活動を改めて意識
- 言語活動が考えを深める場となるよう、手立てを考える

実　践

- 各教科・領域での言語活動を明確化。全学年の年間指導計画に、言語活動例を赤字で加筆
- 考え方、話し方を示したり、語彙を増やすための「ことのはノート」を運用したりする

成　果

- 話し合いなどの中で、友だちと意見の折り合いをつけながら、自分の考えを深められるようになった
- 教師は身に付けさせたい力と、そのための手立てを強く意識。それにより、子どもも学んだことを自覚できる授業になった

School Data

◎1873（明治6）年開校。2003年度から2年間、越谷市教育委員会から「学習指導」（国語）の研究委嘱を受け、以来、一貫して国語を研究。05年度から毎年1回、自主研究発表会を開いている。

校長　山下 浩先生
児童数　362人　　学級数　12学級（他通級指導学級2）
所在地　〒343-0842　埼玉県越谷市蒲生旭町1-84
TEL　048-985-6612
URL　http://school.city.koshigaya.saitama.jp/gamou-e/
公開研究会　2010年度は校舎工事のため非公開

全面実施への助走
第2回

何のため？ 各教科での言語活動

◎課題と研究のねらい

言語活動を通じて子どもの考えを深めさせたい

埼玉県南東部に位置する蒲生小学校。東京都内まで電車で30分程度だが、子どもは都会的というより純朴な気質が強い。素直である半面、自分の考えを発信したり、自ら行動したりする積極性に欠けるのが課題だった。

こうした実態を踏まえ、同校は2003年度から国語を軸にした校内研究を続けている。08年度までの6年間は、主に「書くこと」を中心に表現力の向上に力を入れてきた。その結果、子どもは抵抗感なく文章が書けるようになってきた。例えば、高学年では、水泳の授業についての20行程度の感想文を10分もかけずに書くという。

ところが、他者と意見を交わしたり、自分の考えを深めたりすることは苦手としていたと、山下浩校長は話す。

「自分の考えを自分の言葉で説明することは、これまでの授業でも行ってきました。しかし発表するだけで、出された意見を踏まえ、更に考えさせる指導は十分とは言えませんでした。そこで、例えば、算数で式の論拠を示したり、社会で地域の特産物を調べたら特産の理由まで示したりするなど、さまざまな教科で子どもが交流しながら考えを深める言語活動の場をつくりたいと考えたのです」

また、書くことには慣れてきたものの、感じた思いを常に「楽しかった」で表すなど、表現力や語彙力は不十分な状況が見られた。考えを深め、交流するには、これらの力の向上も必要だと考えた。

同校には国語の研究の蓄積がある。研究の中心はあくまで国語としながらも、自然に他教科への広がりを意識するようになり、他教科・領域でも言語活動を充実させることにつながった。

◎実践

各教科・領域での言語活動を年間指導計画に加筆

まず取り組んだのは、言語活動の全体計画の立案だ。09年度の1学期、研究の全体計画の中で、各教科・領域でどのような言語活動に取り組むのかを簡潔に示した（P.12図1）。

「『考えを深める』には、どのような手法で、どのような教材で、という具体的な手立てが必要です。言語活動はこれまでもずっと行ってきたことですが、考えを深めるための手立てとして改めて書き出しました」（山下校長）

夏休みには、全学年の年間指導計画に、各教科で各月に取り入れる言語活動を一覧にして示した（P.12図2）。従来から使用していた年間指導計画に、言語活動の要素を赤字で加筆した。課題研究主任の鈴木日登美先生は、その理由を次のように話す。

「当初は、もっと詳細な計画を立てるつもりでしたが、資料が多すぎると見なくなると思いました。年間指導計画1枚に言語活動の内容もまとめれば、週案に貼るなどして、すぐに見て、いつでも使えます。赤字部分を追加しただけなので、作成にも時間はかかりませんでした」

各教科・領域での言語活動に当たり、大学教授の指導によって、国語の授業と、その他

越谷市立蒲生小学校校長
山下 浩 Yamashita Hiroshi
「子どもにも教師にも、相手に対する思いやりを持って接していきたい」

越谷市立蒲生小学校
鈴木日登美 Suzuki Hitomi
課題研究主任、6学年担任。「教師になりたくて頑張った頃の原点を忘れないようにしたい」

越谷市立蒲生小学校
飛田明子 Tobita Akiko
研究推進部長、音楽・書写専科。「子どもたちには何事にも本気で取り組んでほしい」

越谷市立蒲生小学校
森下久乃 Morishita Hisano
特別活動主任。「子どもたちに期待して、どこまでも子どもたちを信じ続けたい」

の教科の役割についての意識が変わったことは大きい。それまでは、国語でも子どもに考えさせることを重視してきた。しかし、「作者の思いを感じ取りなさい」と考えさせても、何も感じられない子もいる。どのような言葉で表現したら良いのか分からない子もいる。大学教授の助言を受けて、国語では聞き方、話し合い方などの方法論を学び、他教科でそれを生かしつつ、考えを深める活動をするという役割分担が明確になった。また、考えを深めるための方法や表現するための語彙は、教師が意識的に教えていくという共通認識が出来た。

「まず国語の授業を、子ども自身が何を学んだのかが『わかる』授業にすることが大切なのだと考えました。また、表現力や語彙力が高まらないのは、具体的な手立ての指導が不十分だったと反省もしました。単に読書させたり、文章を書かせたりするだけでは語彙は増えません。教師が具体的な手立てを考えることが必要だと考えたのです」（鈴木先生）

同校の研究テーマ「自ら学び、自分の思いを豊かに表現できる子の育成～『わかる』授業の工夫（国語科を中心として）～」には、このような思いが込められている。

議論を深める言い方、聞き方を伝える

言語活動を意識し、一覧にしたことに加え、言語活動が考えを深める場となるための手立ても講じる。例えば、話し合いにおいて、議論が深まるような意見の言い方を指導する。友だちと意見がおおよそ同じでも、「似ているのですが……」と発表する。「質問はありませんか」と聞くのではなく、「もっと聞きたいことはありますか」などと言うことだ。

一方、表現力や語彙力の向上のために始めたことの一つが「ことのはノート」だ。1人1冊のノートを用意し、季節の言葉や難しい言葉、心に残った言葉などを、ノートに書き留めていく。これに加え、良いと思った時に

図1　各教科・領域での具体的な取り組み（国語、社会、算数、特別活動の抜粋）

国語	社会	算数	特別活動
●課題の明確化 ●目的意識をもって学習に取り組むための工夫 ●見通しをもった学習（カードの利用） ●テキストの音読 ●学習ルールの定着 ●漢字学習の定着 ●「ことのはノート」の活用（語彙力の向上） ●学びタイムの充実 ●ことばのいずみ ●朝の会のスピーチ ●計画的読書活動 ●話し合いの仕方 ●交流の場 ●環境整備	●情報を読み取り、思ったこと、考えたことなどを文章・図表・イラストで表現 ●新聞・パンフレット・リーフレット・記録文などのまとめ方の工夫 ●根拠や具体例を示しての発表 ●テキストの音読	●課題解決学習の充実 ●計算の意味や仕方など具体物や言葉、式、図、数直線などを用いて順序良く表現 ●根拠や具体例を示しての発表 ●既習事項や解決がわかる板書の工夫 ●ふり返り ●テキストの音読	●学級活動における話し合い活動の流れ、話し合いのルール、発表の仕方、聞き方の明確化 ●根拠や具体例を示しての発表 ●自分の考えを発信するための工夫（発表メモ、ふり返りカードなど） ●司会グループの指導、支援

＊同校の資料を基に編集部で作成。表全体は、小誌ウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（小学校向け）

図2　4学年各教科の主な言語活動一覧表（社会、算数の抜粋）

★主な言語活動【具体的活動】―方法例

		1月	2月	3月
社会	単元名	●地図を広げて④　●人形のまち岩槻⑥　●まとめ② ●山の多い小鹿野町⑥ ●お茶づくりのさかんな入間市⑥		
社会	言語活動	調べ学習　★書く【報告】――ノート・新聞・ワークシート まとめ　★書く【まとめ】――クイズ・紙芝居・絵本など ふり返り　★書く【感想、意見】――ノート、ワークシートなど		
算数	単元名	●面積のはかり方と表し方⑪ ●変わり方調べ④	●小数のかけ算とわり算⑭ ●直方体と立方体⑨	●そろばん② ※かけ算を使って② ※4年のふくしゅう③
算数	言語活動	自力解決　★読む【解釈】――文、図、表などからの読み取り ★書く【説明】――ノート、ワークシートなど ★話す・聞く【話し合い】―全体、グループ、ペア ★書く【まとめ】――ノート、ワークシートなど ふり返り　★書く【感想、意見】――ノート、ワークシートなど		

＊同校の資料を基に編集部で作成。表全体、他学年のものは、小誌ウェブサイトでご覧いただけます
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（小学校向け）

全面実施への助走
第2回

何のため？ 各教科での言語活動

使う言葉、あまり良くない時に使う言葉、嬉しい時に使う言葉などを集めた「ごいカード」を、教師があらかじめ子どもに渡すこともある。このカードを「ことのはノート」に貼っておき、文章を書く際に「ことのはノート」の中から言葉を選ぼうというわけだ。

「ごいカード」は各教科で活用していると、研究推進部長で音楽担当の飛田明子先生は話す。

「新学習指導要領では、音楽の鑑賞について『楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表す』という項目が加わりました。そこで、『ごいカード』を音楽でも取り入れました。楽曲を言葉で表す時に『やさしい』『きれい』という表現はあっても、『穏やか』という言葉を知らない子どもがいます。こうした言葉をあらかじめヒントとして出すようにしています」

◎研究の成果

さまざまな意見の中で考えや話し合いが深まる

09年度、特別活動主任の森下久乃先生が担任した4年生の学級では、4月から言語活動を意識して取り組んできた結果、11月の学級活動（P.14）で次のような成果が見られた。

「学級活動はまさに言語活動そのものですが、反対意見が出にくい話し合いは、話し合い活動としては不十分です。友だちのことを否定するのではなく、違う意見があれば、それをしっかりと伝えることによって話し合いや自分の考えが深まります。子どもたちは、互いに意見を言い合いながらも折り合いをつけることが出来るようになりました。そのためには、人間関係が出来ていなければなりません。そうした学級集団をつくり、たとえ整った意見でなくても、自分の思いを伝え合える学級活動を目指して、少しずつ積み重ねた手応えを感じました」（森下先生）

森下先生は、言語活動の実践は子どもの意欲にもつながると実感している。

「自分たちで話し合って決めた学級活動の成功は大きな自信となり、『次も意見を言おう』という意欲につながります。たとえ失敗しても『次こそは』と思えるのです」

各教科における言語活動を一覧表にしたことは、授業の充実にもつながっているという。「言語活動を通じて、教師は何を身に付けさせたいかを強く意識し、子どももそれにより『何が分かったのか』を自覚できるようになりました。例えば、以前はただ感想を書かせていた場面で、今は国語で学んだ文章の書き方を用いて、出来たこと、出来なかったことを書かせるようになりました。言葉で自分を分析し、振り返ることによって、考えも深まりますし、自分の成長がつかみやすくなります。それが子どもの次のステップにもつながると思います」（飛田先生）

「具体的な活動内容を示したので、異動してきた教師も、本校の実践を理解し、授業に反映しやすくなりました。ベテラン教師から若手への継承も、うまく出来ているのではないかと思います」（山下校長）

小さなステップを少しずつ積み上げてきた結果が、今、表れてきていると同校は考える。

「研究のための研究ではなく、常に子どもを見て研究を進めてきました。これからもチームワークを大切に、地道に続けていきたいと思います」（鈴木先生）

山下校長が重視する
校長としての役割

学習には感動を与えることが必要だと思います。その感動体験が、次の学びの意欲となるからです。

子どもたちが感動するような授業をするためには、さまざまな工夫が求められるでしょう。工夫して取り組んだ結果、たとえうまくいかなかったとしても、教師が意欲的に取り組めば、その熱意は子どもにも伝わるものです。そのことに教師自身が気づき、授業の工夫が自分の楽しみになっていけば、教師の喜びや成長にもつながります。そうした意欲を持った教師を育てていきたいと思います。

4年生　言語活動を取り入れた特別（学級）活動の授業

議題「1/2成人式」をしよう

授業者 森下久乃先生　児童数 30人

ねらい

- みんなの思い出になるような楽しい1/2成人式にするために、どうしたら良いかを考えることが出来る
- 一人ひとりがよく考え、みんなに聞こえるような声で積極的に発表したり、友だちの意見をしっかり聞いたりして、話し合いに参加できる

「子どもたちは『話す』ことが出来ても、『話し合う』ことは出来ていませんでした。意見を出し合って、折り合いをつけていく活動にしたいと考えました」（森下先生）

授業の概要

◎議題

約1か月後の授業参観で「1/2成人式」を開く。式の当日に❶何をするのか、❷どんな係があったら良いのかを話し合う。

◎進め方

計画委員の司会2人が中心になって話し合いを進める。
（計画委員は、全7班の持ち回り）

議論の展開

「1/2成人式」で何をするのかという話し合いの中で、児童Aが「自分の夢を発表したい」と意見を出した。これに対して、普段はおとなしい児童Bが「夢を言うのは反対です」と反対意見を出した。児童Bは「夢を持っていない人は、その時に嫌な気持ちになるからです」と反対の理由を説明した。

「私も反対です」と何人かが児童Bに賛同した。すると、児童Cが「夢を持っていないことは恥じゃないです。『今からこういうことを頑張りたい』ということを言えば良いと思います。そのための1/2成人式じゃないですか」と発言。

それでも、夢を持っていない児童たちは「やっぱり嫌です」と反対した。

すると、賛成の児童が「夢を持っていない子は『10歳になってこういうことが出来るようになった。これからは、こういうことが出来るようになりたい』と言えば良いと思います」と提案。

結局、反対していた児童たちも納得。夢を発表することを決定した。

この間、森下先生が話すことはほとんどなく、子どもたちだけで議論を進めていった。

反対意見を交えて議論できた背景

今回の授業までに、4月から学級活動での話し合いを12回開いてきた。その過程で森下先生が指導してきたポイントは主に二つ。

一つは「見通し」を持つこと。4月当初、児童は出来そうにないことを発言するケースがあったが、森下先生は「出来るかどうか考えてごらん」と再考を促しながら、見通しを持って発言する力を伸ばしてきた。もう一つは「統合」すること。それぞれの考えや思いをすり合わせて、まとめていく力だ。

今回、おとなしい児童Bが反対意見を言えたのは、授業参観の時に夢を発表する自分を見通して「嫌だ」と考えたからだといえる。安心して反対意見を言える学級集団づくりも出来ていた。

他者と話し合い、考えを深めるための方法を、活動を通して教えてきたからこそ、それぞれの意見の折り合いをつけながら、「こういうことが出来るようになりたい」と発表することも夢に含まれるという、落とし所を見つける力が育まれたのだ。

授業づくりの考え方

児童から議題が出た時、授業の柱を決めるために文教大と越谷市教育委員会作成の「『言語活動の充実』のためのチェックシート」（P.8参照）を参考にした。今回は、「B 思考、判断等の主な活動」の「関連づける」「比較する」「予想する」などの要素を意識した。

*同校の09年度「第4学年2組　学級活動指導案」を基に編集部で作成